



文部科学省

MINISTRY OF EDUCATION,
CULTURE, SPORTS,
SCIENCE AND TECHNOLOGY-JAPAN

参考資料1-3

「創造的復興教育」の推進

平成24年6月21日

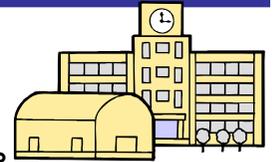
中央教育審議会

教育振興基本計画部会

創造的復興教育とは？

【震災から得られた教訓】～基本計画部会における議論～

基本計画部会では、被災地の教育関係者からのヒアリングを行い、震災の教訓と4つの基本的方向性を導き出した。



- 【イ社会を生き抜く力の養成】困難に直面しようとも、諦めることなく、状況を的確に捉えて自ら考え行動する力の重要性
- 【ロ未来への飛躍を実現する人材の養成】新たな社会的・経済的価値を生み出すイノベーションの創造など、未来志向の復興・社会づくりを目指していくことの重要性
- 【ハ学びのセーフティネットの構築】経済的理由など様々な事情によって制約されることなく、すべての子ども・若者が安心して必要な力を身に付けていける環境整備の重要性
- 【ニ絆づくりと活力あるコミュニティの形成】人々や地域間、各国間に存在するつながり(絆)や、人と自然の共生の重要性

東北の地から未来型の教育モデルづくりを促進し、かつ全国に広げていく必要がある。
→ 文部科学省としては「創造的復興教育」を推進していく。

【創造的復興教育について】

→例えば、以下の特徴などを含む、被災地からの特色ある教育実践。
このような教育実践は、教育復興基本計画の4つの基本的な方向性と軌を一にするもの。
文部科学省としては、こういった先進的取組の成果を収集・抽出して、全国に発信していく。

<創造的復興教育の特徴 例>

- ①大学やNPO、ボランティア、地域住民等の多様な主体による協働型の教育
- ②予測困難な社会の中で、自ら学び考え行動できる力を養う教育（イ社会を生き抜く力の養成）
- ③グローバル社会に対応した、新たな価値を創造・主導するイノベティブな教育（ロ未来への飛躍を実現する人材の要請）
- ④ITの活用を含む多様な学びの場の確保により、誰でもアクセス可能な教育（ハ学びのセーフティネットの構築）
- ⑤故郷愛や絆に根ざした、復興を支える地域の人材を生み出す教育（ニ絆づくりと活力あるコミュニティの形成）

創造的
復興教育

創造的復興教育の推進体制

<文部科学省>

- 「復興教育支援事業」により、特色ある教育支援の取組や、教育プログラムの作成を支援。(H23年度補正予算3億円(58団体を採択)、H24年度予算0.6億円(12団体を採択))
- 「学びを通じた被災地の地域コミュニティ再生支援事業」により、自律的な復興に向けた地域課題の解決やコミュニティの再生を支援。(H23年度補正予算5億円,H24年度予算11億円)
- 「大学等における地域復興のためのセンター的機能の整備」により、大学等のリソースを集約させ、地域の復興センター機能を充実。(H23年度補正予算20億円(14大学等を採択)、H24年度予算10億円の内数)

支援・連携

<一般社団法人創造的復興教育協会>

【平成24年2月設立。代表理事は高橋孝助氏(前宮城教育大学学長)】

- 文部科学省と連携して、復興教育に関する情報を共有し、ネットワークを構築するとともに、先進的取組を全国に発信することを目的として活動。

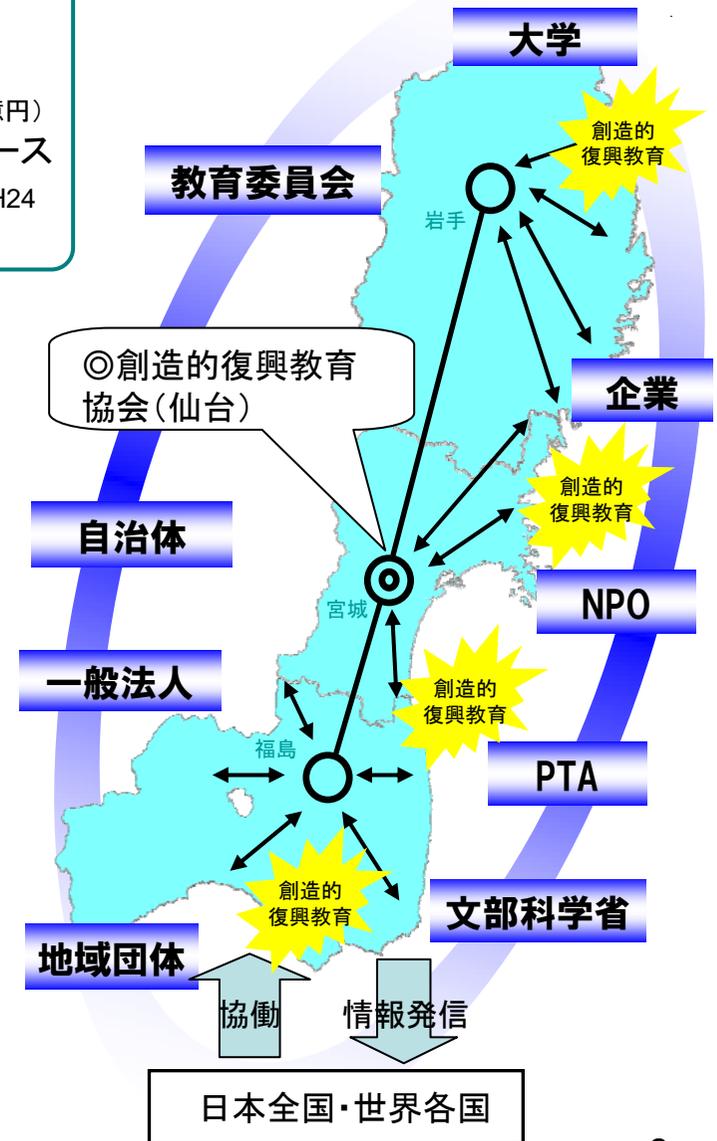
〔創造的復興教育に係る実践事例の情報共有、現地での実証研究、
ニュースレターの発行、フォーラムの開催による広報活動等〕

【写真】

平成24年5月20日「創造的復興教育フォーラム」(創造的復興教育協会主催)を文部科学省講堂で開催。福島県立いわき総合高校による原発問題を扱った演劇の公演など、創造的復興教育の事例発表を実施。平野文部科学大臣も出席。



(参考)創造的復興教育の展開イメージ



創造的復興教育の実践事例①

＜コラボスクール女川向学館・大槌臨学舎＞ （NPOカタリバ、女川町・大槌町教育委員会）

- 女川町・大槌町教育委員会とNPOカタリバが協働して、放課後の補習教室を開講。（授業料は無料、講師は現地の教育事業者を雇用）
- 女川町では、カタリバが、教育委員会と連携して、キャリア教育に関するプログラム（職場体験活動、修学旅行内体験学習）も企画運営。
- 大槌町では、女川向学館の姉妹校として、平成24年1月に大槌臨学舎を開校。

＜創造的復興教育の特徴＞

NPOが地域人材を雇用し、教育委員会など多様な主体を巻き込み、仮設住宅等で暮らす子どもたちの学びの場の確保を行っている。

➡ ①②④⑤関係

【写真】 女川向学館での学習風景



＜OECD「東北スクール」＞ （OECD(経済協力開発機構)）

- 東北の中高生の復興への参画と、グローバル人材育成を目的として、アートやマーケティング、教育など、学際的に専門家のアドバイスを受つつ、複数回のワークショップと各地域の活動を合わせた教育プログラムを行う。福島大学が運営事務局を担当。
- 平成26年夏に、パリで東北・日本をPRするイベントを実施することを目指す。
- 第1回は平成24年3月に福島県いわき市にて実施され、東北3県の中高生約100名が参加。

＜創造的復興教育の特徴＞

創造的復興に必要なコンピテンシー・スキルを身につけることを目的とし、国際機関の全面的な協力のもと、産学官の協働で従来にない枠組みで推進。

➡ ①②③⑤関係

【写真】 第1回「東北スクール」(平成24年3月26～30日)



創造的復興教育の実践事例②

<ヤングアメリカンズ「アウトリーチ」>

(NPOじぶん未来クラブ)

※ヤングアメリカンズとは1962年に設立された、音楽公演と教育活動を行うアメリカの非営利団体。

○アメリカ大使館や各教育委員会の協力を得て、被災地の子どもたちがアメリカの若者たちと一緒に、英語による歌やダンス、などのワークショップを実施、最後には参加した子どもたちが、学びの成果を英語によるショーとして披露。

○これまでに石巻市等18会場でミニワークショップを実施、約1,000名が参加。平成23年1、2月のトライアルを経て、平成24年9月～11月にかけて、いわき市など東北3県7市の教育委員会と協力してフルワークショップツアーを実施予定。

<創造的復興教育の特徴>

音楽やダンスなどの表現活動を通じて、国際社会や英語への関心を高めるだけでなく、自らを表現し、相互に伝え合うことの喜びを体得する。

➡ ①②③関係

【写真】 ヤングアメリカンズ ワークショップとショーの様子



<全国生徒会サミット>

(SEND to2050 PROJECT)

○東北から次世代のリーダーを育成するべく、中学校の生徒会リーダーによるサミットを開催し、子どもたち自身が地域の復興のための行動を起こすことを支援。

○平成23年9月、震災を受け中学生として何ができるかを、被災地と全国の生徒会代表が議論し、アクションプランを発表(未来づくりアジア子どもサミット)。

○平成24年は、被災3県にて自治体別に生徒会サミットを開催、8月には3県の約100校と全国の中学生リーダー等が釜石に集い、復興・街づくりを議論し提言を発表、9月～12月に実践モデル校を構築し、25年1月には3県の実践事例校による発表会の開催も予定。

<創造的復興教育の特徴>

被災地から次世代のグローバルリーダーを育成するためのプログラム。中学生が復興や街づくりについて熟議、参画し、各地域での発信と行動につなげる。

➡ ①②③⑤関係

【写真】 未来づくりアジア子どもサミット(平成23年9月17日～19日)

